風景デザインレター from 九州(第 41 号)

「らしさ」を考えるときに、まず、その言葉の定義そのものを考えることも必要かも。例えば、今回紹介する本は、「惑星」の定義を巡っての論戦が繰り広げられたことがドキュメント的に掲載されています。前回、「○○風」ということを書いたので、今回は、定義そのものを「らしさ」との関係で見てみたいと思います。（・・・この話は後半で。まずは、寅さんから）

言葉の定義はそうとに難しい！というのは哲学の問題に加え　、文化的な問題も？？。

実は、後半の「らしさ」と「定義」の話が今回の配信版の予定だったのですが、急遽、はじめに寅さんの話を追加します。

最近はやりの隔週配信の DVD シリーズで、寅さんシリーズが始まり、コレクター趣味がむっくり顔を出し、買い集めることにしました。理由は、映画そのものの面白さ、渥美清の演技や、「コメディ（喜劇）」が「ペーソス（哀感）」に移り、最後は「エレジー(悲歌)」に変貌する寅さんの作品のすごさに加え、作品の舞台として、それぞれの作品で地方地方の魅力を最大限醸し出してくれるということや、30 年から 40 年前の日本の風景が描き込まれているということも大きな理由です。監督の山田洋二が、いかにその舞台となる地方を描いているか、短いシーンの中に、地域らしさ、あるいは、地域のエッセンスをいかに取り上げて表現しているか、どのような風景の捉え方をしているか等、考えさせられること大と思われるからでもあります。

さて今回紹介する DVD 配信第 2 回目は、第 17 作(全部で 48 作ある)の「寅次郎夕焼け小焼け」です。舞台は、2 年前に大阪本社のお手伝い仕事で関係した兵庫県の揖保川沿川にある「龍野」です。

解説によれば、龍野は、かつて醤油産業等で栄えた町で、作品の中にも頻繁に醤油江場の煙突や板塀のある細い路地がロケ地としてでてきます。特に、龍野芸者のボタンさんであるマドンナと再会するシーンでは、家の前を流れている水路で洗い物をしているところが描かれています。醤油の町ということはきれいな水の町ということでもあり、水路のシーンに加え、揖保川の支川にかかる何の変哲もない橋や、電柱もしっかりある路地が、心をひきつける場所として、また、印象に残るシーンとして使われていることも面白い感覚でした。これからほかの作品を見ていくつもりですが、いままで見た記憶のある作品でも、その場所場所で、有名な名所は取り上げられているのですが、さりげない場所で大切なシーンを取っているように思われます。今回も、小さな橋の錆びた高欄や、少し廃れた龍野の町が、華やかではありませんが、懐かしさに加え、ある風情を醸し出していることに、むしろ驚きに近い感覚を持ってしまいました。

何度も書いてきたことですが、風景は、そこで生活している人々の健全さが写し込まれていると考えていますが、人間と同じように、というか、風景を見るのは人間であるということで、風景には、必ずしも健康美としての美しさだけでなく、当然、老齢化した美しさや、病身的な美しさというものもあるのかもしれません。今回のかつての繁栄が見られない龍野の町も、若くて元気な健康美ではなく、歴史を刻んで来た街の重みというものが美しく感じ、決して、寂れた、あるいは荒れたというものとは違う風情を感じます。

あと今回の作品で感じたのは、ほとんど揖保川の風景はでてこなかったのですが、ご存知のように、

寅さん映画のシンボル的な風景は、近代河川工法で整備された画一的な 2 割の法勾配の芝生による堤防と、公園的整備をした高水敷の江戸川の風景でしょう。

勘ぐれば、柴又の伝統的な街と、江戸川の河川の姿を対比的に考えているのかもしれませんが、その味もそっけもない江戸川の風景を味わい深い下町の空間に結び付け、独特のイメージを作り上げようとしたのかもしれません。仮に、寅さんの江戸川の風景が、多自然型川づくりによるものであったら、下町の雰囲気とはうまくマッチしなかったもしれません。恐らく、マッチしないでしょう。

これは、寅さんの作品としてみれば、その時その時を一生懸命に生きている姿が描きたいのに、過去を反省し、知恵と工夫を取り入れた川の姿は、寅さんの舞台としては、少し趣が違うということかもしれません。？？？？

やはり、風景というものを相手にするということは、本当に、難しそうです。・・・・・・・・

（ここからが本編です）

【「地域らしさ」はデザインできるか？】

「地域らしさ」についてもう少し考えてみることにします。

今回紹介した本「かくて冥王星

は降格された」は、海王星の外側を回る惑星としてアメリカ人により発見された冥王星(プルート)が、惑星というポジションから準惑星という立場に降格された流れをドキュメンタリーに紹介しているものです。この本からは、分類したり区分けしたりする際の基準の設置のむずかしさが示されており、特に、その基準が当初予定されていた極めて明確な区分から飛び出し、少し変則的なものが出てきたときに大議論になるということがしっかりと述べられています。

確かに、物事を分類するためには、「定義」しなければいけません。ただ、哲学分野での常識ということで知っていることで、物事を肯定的な項目で定義することは基本的にできないことがあり、物の定義は否定にあるということも面白い現象だと思われます。否定的なことで定義をするとは、例えば、人間というものを定義するときに、現在は、感覚として一目瞭然としているようですが、ロボットやアンドロイドの機械から人間に近付くものや、人工心臓移植や義手など本来生まれて持って来た体がどんどん離れていく？ような場合のSF 的な将来のことも想定し考えると結構難しいものです。極論として思考を受け持つ脳さえ自分のものであれば、自分であるということですが、これさえも怪しい。脳そのものでなく、その脳にインプットされている思考回路さえ自分のものであればいいということになると、コンピューターのハードディスクやメモリーに自分の思考回路が入っていれば自分かということで、これは、生理的にも自分ではないでしょうと考えてしまいそうです。そのように、○○であるという肯定的なものいいでなく、○○でないという意味での否定的表現ということでしか決着がつけられない。究極は、人間の定義は「人間でないものではないもの」という 2 重否定により定義されるということです。

さて、このような区分、分類の問題の際に起きる「定義」と、「らしさ」を考えるとき、この両者の違いはどこにあるのでしょうか。少なくとも「らしさ」は、肯定的な物言いで構築されていくもので、否定的なものでは、いつまでたっても、いくつ否定的なことを並べても「らしさ」にはつながりません。つまり、「らしさ」とは、肯定的なものを集めたときのぼんやりした明確な定義には至らない、そんな存在のようです。「福岡らしさ」は、「福岡」を定義する際の肯定的な物言いということではないでしょうか。そして、地域の名称である「福岡」は、ものではないため、定義するためには、境界を定めることになり、行政界としての福岡市であったりするのです。しかし、例えば、市町村合併の際に、福岡市と合併するためには、福岡らしさがなければならないというように条件を付けると（これは、福岡という地名を大切にする必要な条件だと思いますが)、福岡らしい範囲を風景や生業、祭り等の文化的なことや言葉等、いくつもの条件を確認し、評価すること

になりますが、その際の最も優先度が高いことは、「らしさ」を構成している内容によって異なってくるものと思われます。例えば、福岡らしさは、博多弁の影響が最も大きいということであれば、範囲を博多弁をしゃべっている範囲ということで決めることができますし、食文化に求めるのであれば、食材の供給状況から調理のやり方等を比較することでその範囲を見つけることができます。あるいは、エッフェル塔がシンボリックに見えている範囲が、パリらしい場所というように、物理的なものかもしれません。

さて、今回は、やたらややこしい話を書き綴りましたが、「○○らしさ」「○○風」に加え、定義「○○」ということを題材に少し話を広げてみました。

ここまでの結論では、「○○らしさ」と「○○風」は、対立するもので、定義としての「○○」は、「○○らしさ」の肯定的な部分で構成されているとみなすことができるということです。　　【続く】